

巨大地震後の二次災害（土砂災害）から命を守ろう！

日本災害情報学会理事 池谷 浩



M9.0という超巨大地震はその後M7クラスの余震を多発させている。今後も発生が予想されている余震や目前の雪解け出水、その後の梅雨期の豪雨に対して二次災害が心配される場所である。

二次災害の中でも崩壊、地すべり、土石流といった土砂の移動現象によって発生する土砂災害には特に注意が必要である。その強い揺れで斜面が緩んでいる地域が多くあるためである。

国土交通省の調査によると今回の地震で土砂災害が発生した場所の震度は、本震・余震を含めほとんどが5強以上であった。新潟県中越地震の際の調査では、大規模な崩壊は、すべて震度6弱以上の場所で発生していた。もちろん、同じ震度でも揺れの方向や継続時間などによりその影響度合は異なるが、安全確保のために震度という指標を使うことが考えられる。

地震後の豪雨に対する注意も大切である。例えば関東大震災の際、本震から14日後の降雨により土石流が多発した。特に神奈川県伊勢原市大山地区では、連続雨量200mmを越す豪雨により人家140戸を押し流す土石流が発生している。また、現在雪のある地域では急激な雪解け出水による地すべりや崩壊、そして土石流の発生の恐れも大きい。

二次災害から人的被害を防ぐためのアラームとして、豪雨に対しては「土砂災害警戒情報」を活用したい。すでに強い揺れのあった地域では基準値を下げて暫定運用がなされていることから、土砂災害警戒情報が出たらひとまず安全な場所に避難することが望ましい。

余震に対しては震度5強以上の揺れの可能性のある場を特定するアラームとして「緊急地震速報」を用いたらどうだろうか。課題は緊急地震速報を受信してから災害発生までの間に時間的猶予が極めて少ないことである。この課題に対しては平常時に家の中の安全と思われる場所、例えば二階、壁や塀が丈夫なところ、山やがけから遠い部屋等を家族で話し合っておくことが有効である。

特に土砂災害警戒区域内に住まわれている方々や家の近くのがけや裏山にクラックが生じているところ、斜面の木の傾きが周辺と異なるところ、地震後水が湧き出しているところなど地震前と異なる状況が生じている場の近くに生活されている方は、余震や豪雨に対するアラームが発信されたらとにかく安全なところへ移動すること。特にお年寄りなど災害弱者への配慮も忘れずに実行してほしい。

地盤が強く揺すられて今までとは状況が変わっていることを認識して、しばらくの間土砂災害のアラームに気をつけたいものである。本震で助かった命を二次災害でなくしてはならない。

（〈財〉砂防・地すべり技術センター理事長）